第２章　金沢区の成り立ちとまちづくり課題

１　金沢区の成り立ち

(1) 金沢区の原地形

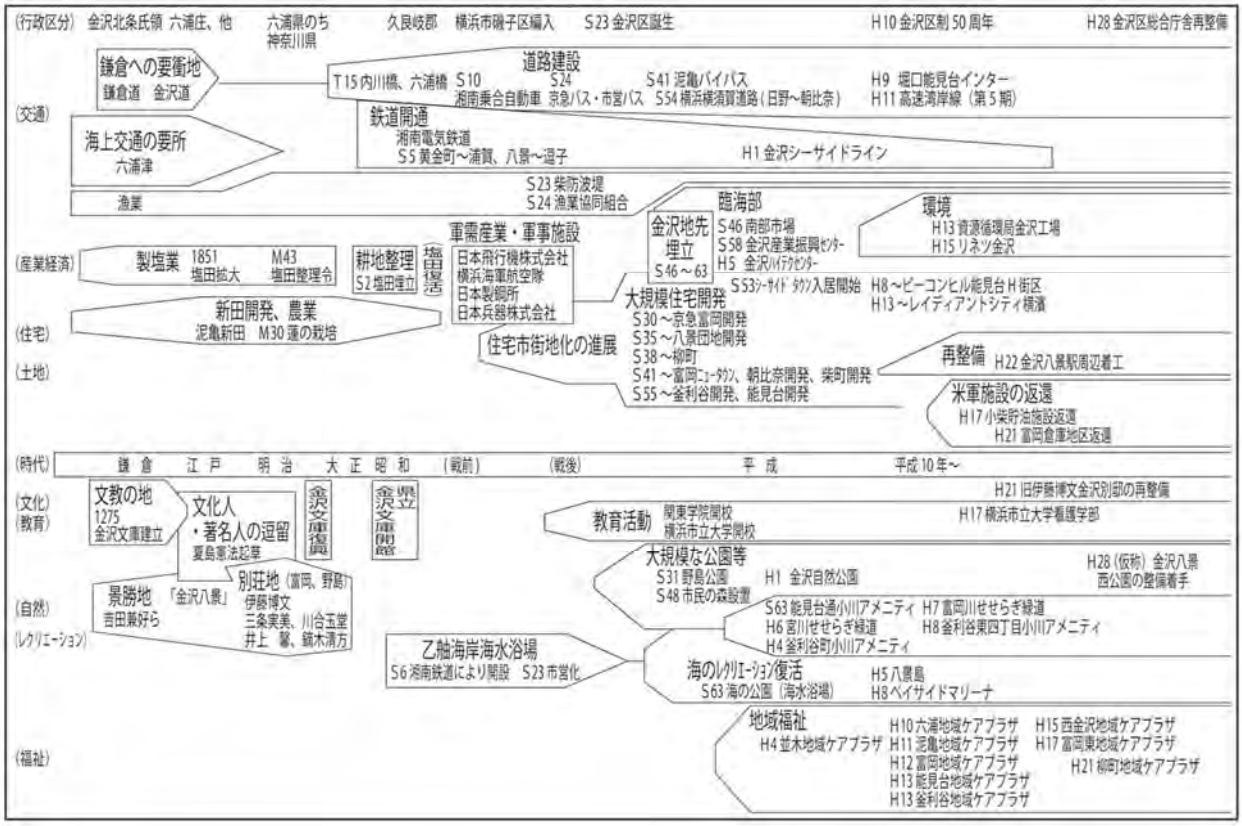
現在の金沢のまちは、長い時間の中で多くの開発が行われてきました。その開発は、海の埋立や丘陵部の造成など、時としてきわめて大きなものでしたが、原地形の有していた特徴や構造的なまとまりの影響を少なからず受けています。

区内でも、郊外部を中心にまとまった緑地があり、身近な緑の拠点を形成しています。また、南西部では宮川や侍従川、北部では富岡川、杉田川といった流域を形成しています。それらの小河川が谷戸を刻む地域は複雑な丘陵地形をなしています。

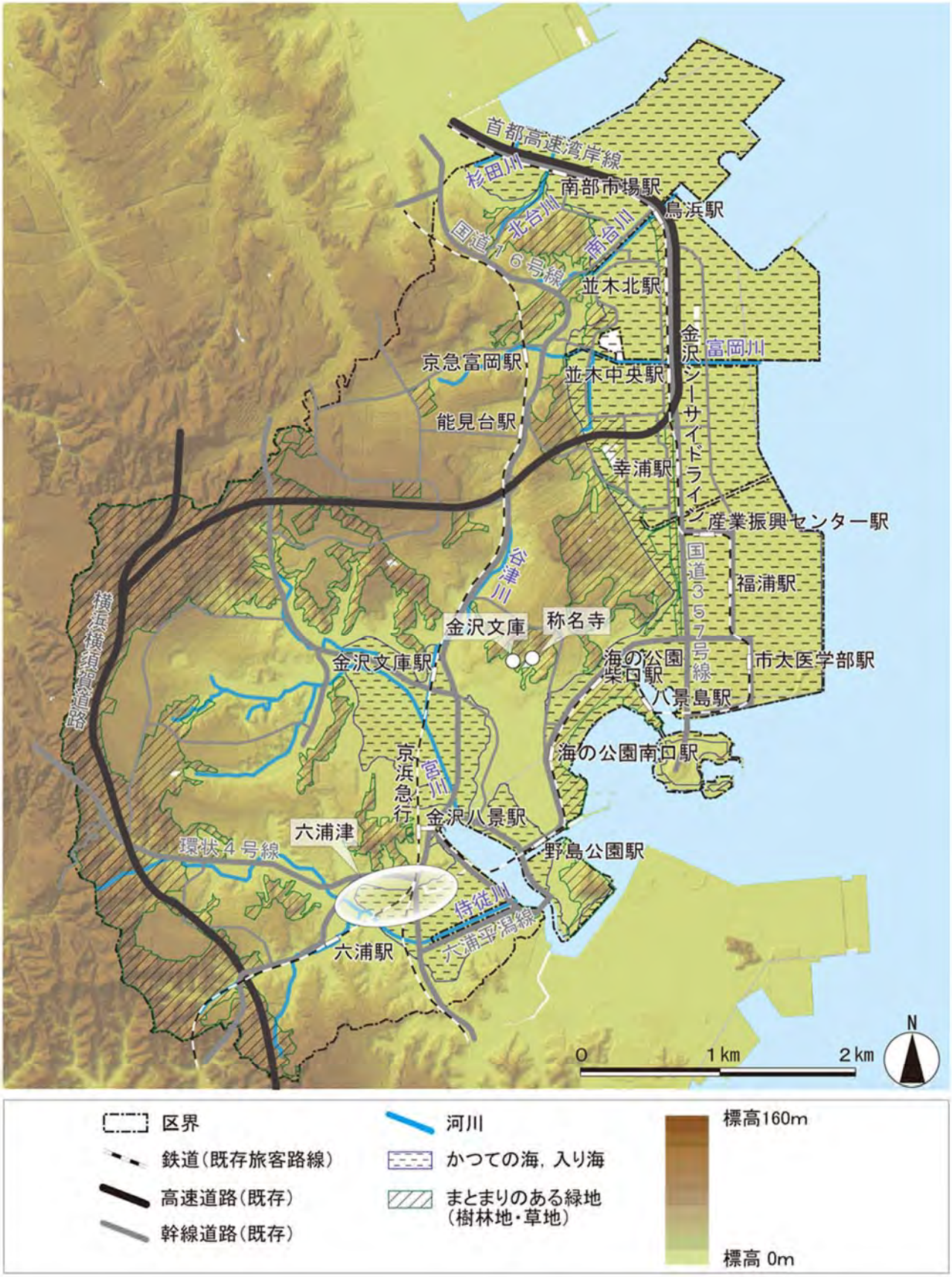
(2) 金沢区の成り立ち

金沢の地には、野島貝塚や称名寺貝塚などの多くの遺跡が物語るように、縄文時代の頃から人々の生活がありました。鎌倉時代には、東アジアに開かれた貿易港「六浦津（むつうらのつ）」や金沢北条氏が残した「称名寺」「金沢文庫」が立地し、交通上、経済上及び文教上、鎌倉政権の東の重要な拠点をなしていました。江戸時代に入ってからは、平潟湾周辺地区を中心に、歌川（安藤）広重の浮世絵にも描かれた風光明媚な遊覧地として多くの観光客をひきつけ、明治・大正期も、富岡や野島などが文人や政治家たちの別荘地やレクリエーションの場となるなど活発な人と物の交流を生み続けました。さらに昭和期に入り、戦前になると、軍港横須賀の後背地として多数の軍事施設や軍需産業が立地しました。

●金沢区のまちの歴史的変遷と近年のまちづくりの進展



●金沢区の立体地形図



出典：基盤地図情報数値標高モデル5mメッシュデータより作成

(3) 都市化の進展

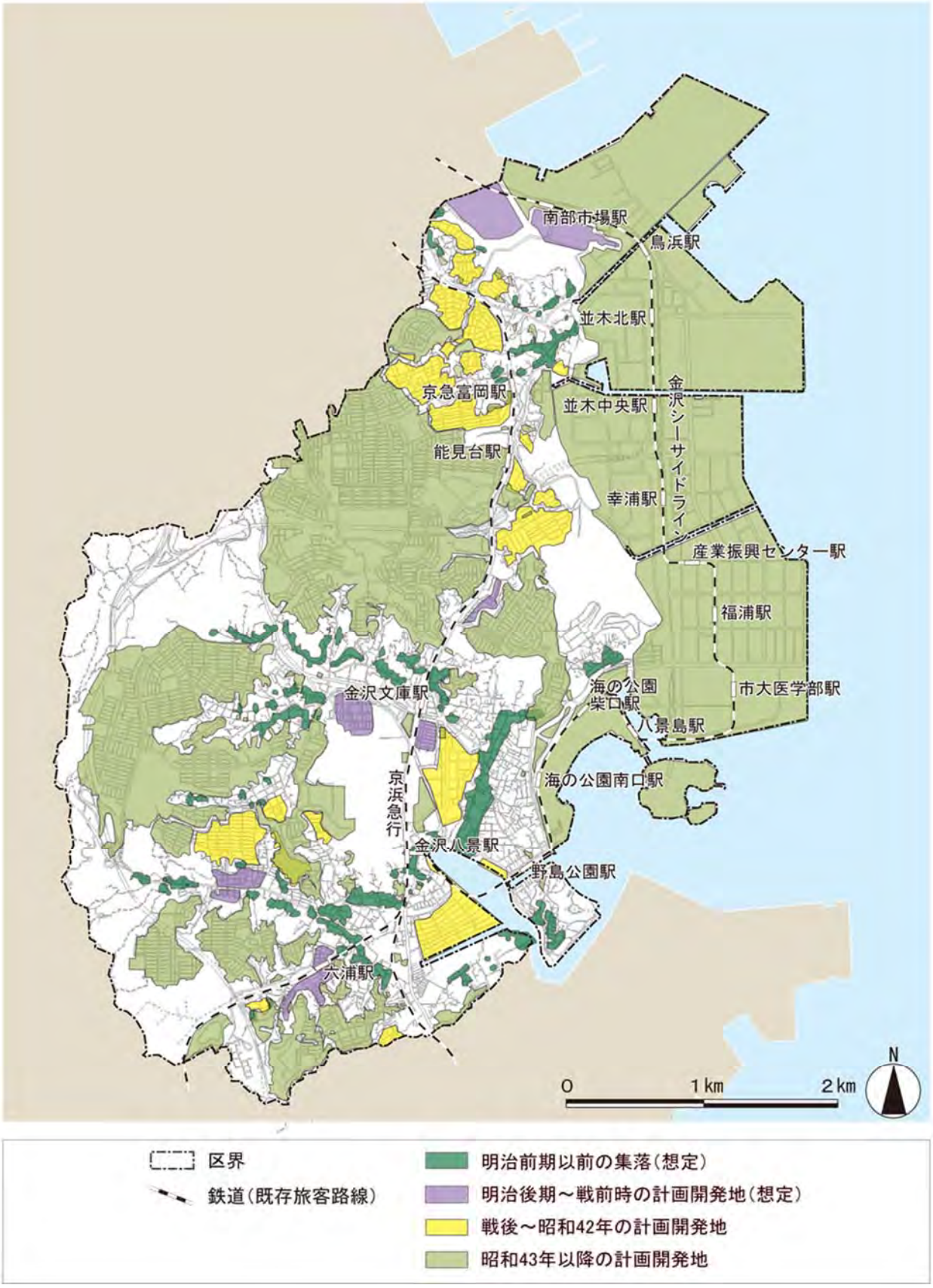
戦後の高度経済成長期以降は、首都圏の海に近い温暖なベッドタウンとして脚光を浴びることとなり、住宅市街地開発が進展し、急激な人口増加と土地の改変を経験しました。その後、金沢シーサイドラインの新設、首都高速道路湾岸線の延伸に伴い、臨海埋立部を中心に産業団地、海のレクリエーション施設の開発が行われるとともに、駅周辺では土地区画整理事業等による再整備が今に至るまで続けられています。

このように、まちの姿は変わりましたが、いつの時代でも地理的要衝の地にあり、その時々に最新の生活文化が育まれ、その結果として、多彩な地域が並び立ち、成り立ってきたところが金沢区の特徴といえます。

●時代ごとに見る土地の開発と活用の概要

時代	時代ごとに活用していた場所（地域）	開発と活用の特徴
鎌倉時代以前～ ＝村の時代	谷戸 海と海沿いの低地	・自然発生的に生まれた村。 ・狭い谷戸に里山を背景として小さな単位で農耕を営む。 ・富岡、柴、野島など外海に面した低地部に漁村が成立。 ・こうした背景をもつ領域では、現在に至るまで、村時代の自然発生的な土地区画や道路系の上に、敷地単位のスプロールが進行した形となっている。
鎌倉時代 ＝水運の要地 ＝文教の地	入り海と潟	・「朝夷奈切通（あさいなきりどおし）」が開かれ、鎌倉と直結。 ・幕府は六浦に港を開き、房総をはじめとする各地との交易により、鎌倉への日用品の供給地とするとともに、防衛上の拠点とした。 ・幕府は金沢文庫を建立し、文教の地とした。
江戸時代 ＝景勝の地 ＝新田開発の地	入り海と潟	・「金沢八景」は、心越禅師が八編の詩をつくって以来、多くの人に知られ、瀬戸橋付近には茶店が並び、庶民の観光地として賑わう。 ・文化人も長く滞在して文芸活動を行う。 ・横浜で唯一の大名、米倉氏が居（陣屋）を構える。 ・浅瀬であった入り海では新田の開発が始められた。
明治・大正時代 ＝レクリエーションの地 ＝別荘地	海と海沿いの低地	・横浜開港に伴い、関内に外国人居留地ができると、富岡が避暑地として使われる。各界名士も別荘を建てた。 ・海水浴が日本人の一般的な海でのレクリエーションとなり、富岡の海岸や乙舳（おっとも）海岸がにぎわう。
戦前・戦中時代 ＝軍需産業と海軍施設の地	入り海と潟、海、谷戸	・入り海や富岡の海岸部などが埋め立てられ、海軍施設と各種軍需工場が建設された。 ・横須賀の海軍工廠（こうしょう）など軍事施設や軍需産業に勤める工員住宅が谷戸部につくられる。
昭和30年代 ～40年代初頭 ＝郊外住宅地	丘陵 入り海と潟	・富岡西、長浜、六浦三丁目、柳町などで住宅地開発。 ・最大でも開発規模20ha程度までの比較的小単位のものが多い。 ・山や丘を大きく削ることなく造成しているため、宅地の勾配が急で、道路も原地形の等高線の面影を残してカーブしたものが多い。 ・公園は少ないが、開発単位の隙間に斜面緑地が残る。
昭和40年代後半以降 ＝郊外住宅地 ＝新産業の地 ＝海と山のレクリエーションの地	丘陵 海	・能見台、釜利谷西、東朝比奈、並木などで住宅地開発。 ・開発規模50haを越える大規模開発が目立つ。 ・造成技術の進歩もあり、大きな造成が行われ、比較的緩い勾配の直線道路により、整然と区画された街並みがつくられた。 ・一定の量の公園が確保され、歩行者専用道路など歩行者のための空間もつくられるようになった。 ・開発地内部には自然緑地はほとんど見られないが、開発規模に応じて周囲にまとまった形で残されている。 ・昭和町・鳥浜町から幸浦・福浦にかけて、大規模埋立により新たな産業都市金沢の姿が出現した。 ・海の埋立地には「海の公園」と「八景島」という人工的につくられた大規模な海のレクリエーション空間が生まれ、丘陵部には「金沢自然公園」やいくつかの市民の森が指定され、森のレクリエーション空間が確保された。
平成時代 ＝隙間開発 ＝自然環境保全と回復の時代	谷戸と丘陵の隙間	・ほぼ全域がスプロールした谷戸部と大規模に開発された丘陵部の隙間として存在した斜面緑地が、集合住宅などとして開発されつつある。（斜面に沿った中高層建築物が主体） ・自然環境の保全・回復を目指し、自然的環境と直接係わる市民の活動が活発化している。

●年代ごとの計画開発地



※昭和 43 年に横浜市宅地開発要綱が制定され、それ以降の開発地の環境は制定以前とは大きく異なりますので、本図ではこの年の前後で凡例を区分しています。

出典：横浜市都市計画基礎調査データ、都市計画決定データより作成

２　金沢区の現況とまちづくりの課題

区全域にわたる宅地開発が一区切りし、昭和の時代に急増した金沢区の人口は、平成18年頃まで緩やかに増加していましたが、以降減少しており、今後も減少傾向が続くことが予測されています。こうした状況の中で、金沢区を取り巻く社会状況や動向、現在の都市環境が抱えるまちづくりの課題を、次のように整理しました。

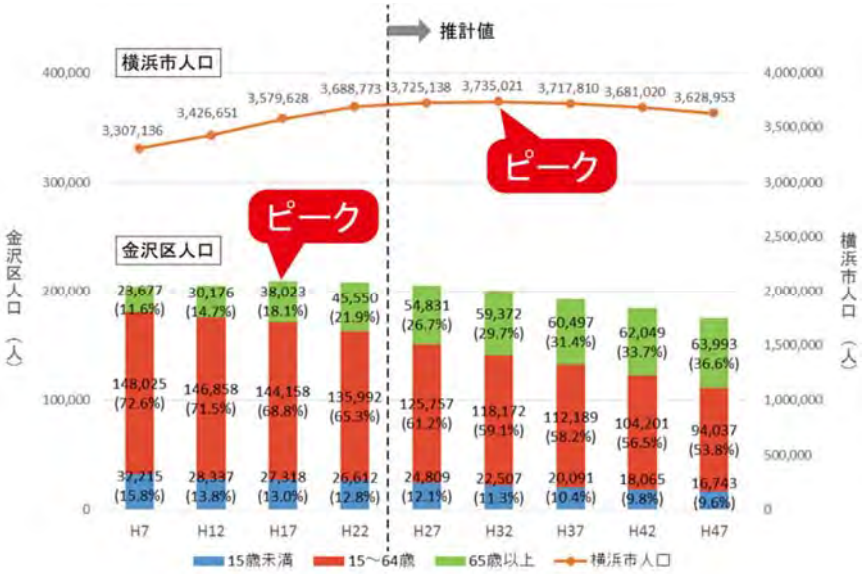
(1) 人口変動や高齢化

＜現況＞

金沢区の平成 27 年の総人口は 202,300 人※であり、この 10 年間で約 7,000 人（約 4%）減少しています。また、世帯数は増加を続けてきましたが、平成 22 年以降は横ばいになっています。

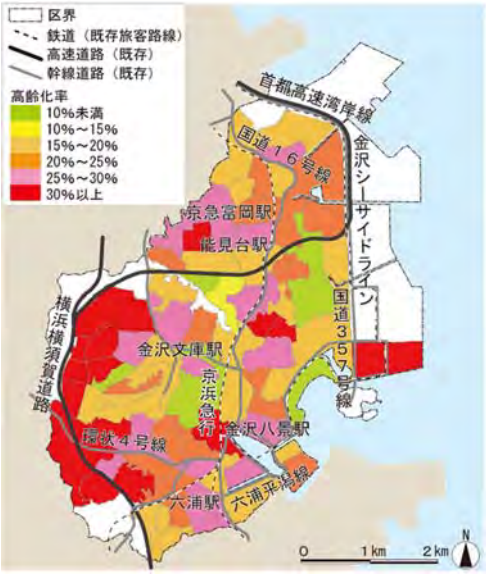
平成 17 年から平成 27 年までの年齢 3 区分別の人口割合の推移をみると、老年人口（65 歳以上）が 8.6 ポイント増加しているのに対して、生産年齢人口（15～64 歳）が 7.6 ポイント、年少人口（15 歳未満）が 0.9 ポイント減少しています。また、町丁別高齢化率をみると、区西部で高齢化率が高まっています。（※平成 27 年の総人口のみ、平成 27 年国勢調査の速報値による）

●金沢区と横浜市の人口推移と将来人口推計



出典：横浜市の将来人口推計（平成 26 年）及び国勢調査（平成 27 年）

●金沢区の町丁別高齢化率



出典：国勢調査（平成 22 年）

＜課題＞

今後も区の全域で居住者層の人口減少や少子化、高齢化率の上昇が見込まれるため、福祉施設の利便性向上やバリアフリー環境の整備により、誰もが快適に暮らすことができるまちづくりを進めていく必要があります。

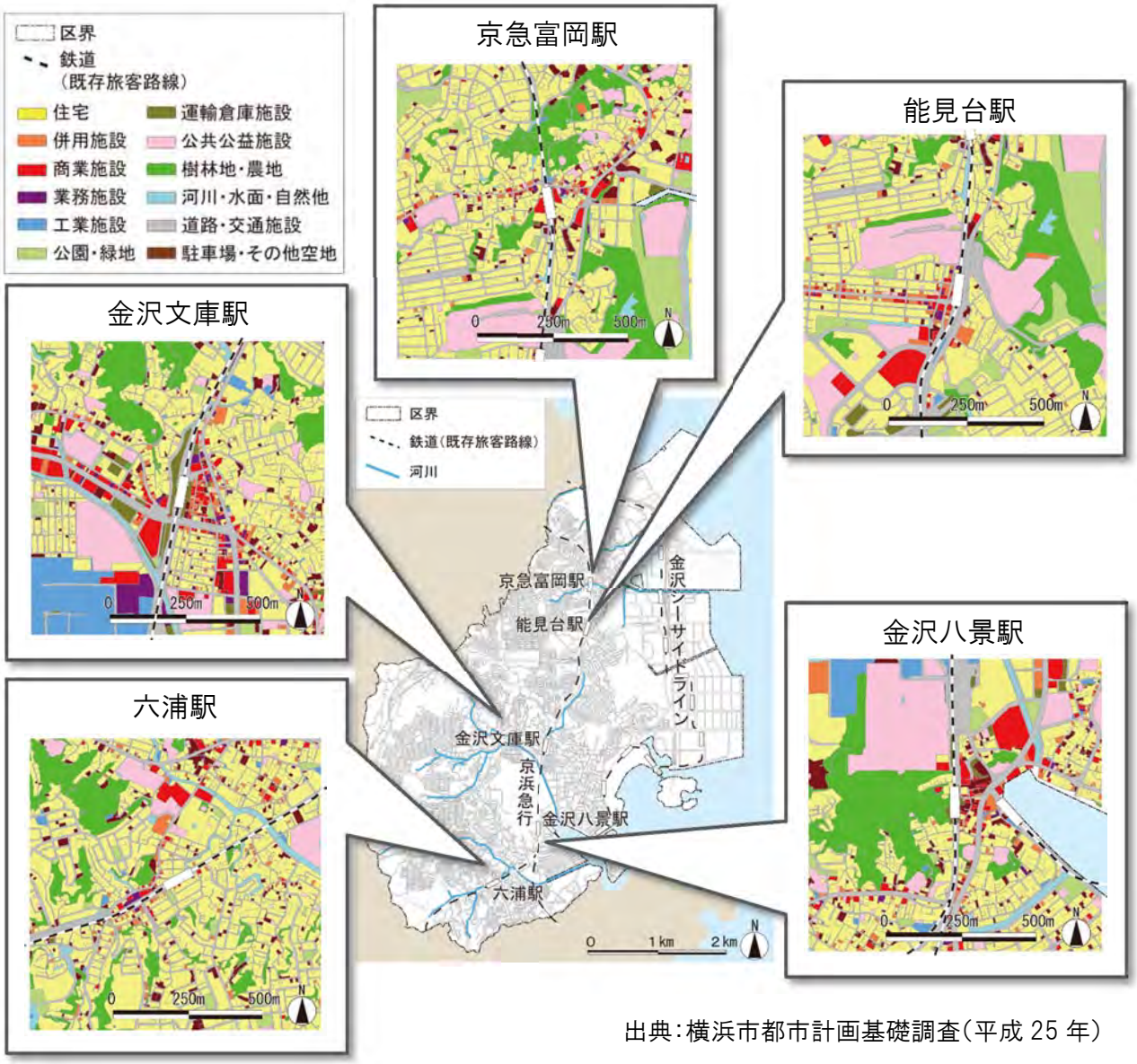
また、生産年齢（15 歳～64 歳）層の定住化のためには、通勤のしやすさや職住近接、子育て支援の充実など地域特性を生かしながら実現する必要があります。さらに、これら持続可能なまちづくりのために、広い世代が自由に社会参加できる環境づくりが求められています。

(2) 生活拠点

＜現況＞

京浜急行各駅の周辺には商業施設や業務施設が立地し、交通の結節点であるとともに、後背に広がる住宅地での地域生活の拠点として、役割を担ってきました。また、それぞれの駅周辺に丘の緑、海、川などが接近し、特に金沢文庫駅や金沢八景駅周辺には、観光・交流の起点となるような歴史・地域資源が点在しており、駅周辺の魅力をつくっています。しかし、比較的古くから開発された低地部の、谷戸口に近い位置にあるため、幹線道路網が集中する傾向にあるなど都市基盤が弱く、さらに更新や機能集約はなかなか進んでいません。

●京浜急行各駅周辺の土地利用現況図



出典：横浜市都市計画基礎調査（平成 25 年）

＜課題＞

京浜急行各駅の周辺に位置する中心市街地の都市機能を充実し、地域商業の活性化、拠点機能の充実、街並みの魅力化など地域の持つ資源や特性を生かした生活拠点を形成する必要があります。特に乗客数の多い金沢文庫駅や金沢八景駅などの主要駅では、都市基盤の再編、区の中心としての魅力化といった視点からのまちづくりが必要であり、それぞれの特徴を生かした、魅力ある生活拠点を形成する必要があります。

(3) 交通ネットワーク

＜現況＞

金沢区の道路網は主に狭い谷戸筋など低地部を軸として形成されてきました。そのため、南北方向交通は主として国道 16 号線に依存し、また、東西方向交通は古くから沿道市街地が形成されてきた谷戸筋の道をそのまま利用しているのが現状です。首都高速道路湾岸線の延伸や金沢シーサイドラインの開通により、都心部への利便性や南北方向のアクセス性は向上しましたが、依然として慢性的な交通渋滞が発生する区間も残るなど、車やバスを使ってのスムーズな移動に支障をきたすことがあります。

また、幹線道路では、段差があったり、歩道が途切れてしまったりするなど、十分な歩行者空間が確保されていない箇所が存在します。また、区の南西部には徒歩圏の目安となる駅から半径1km 圏及びバス停から半径 300m 圏に含まれていない地域が存在しています。

●金沢区の混雑度

混雑度	交通状況の推定
1未満	道路が混雑することなく、円滑に走行できる。
1.00-1.25	道路が混雑する可能性のある 時間帯が1～2時間あるものの、何時間も混雑が連続する可能性は小さい。
1.25-1.75	ピーク時間帯はもとより、ピーク時間を中心として混雑する時間が高い状態。
1.75以上	慢性的混雑状態。

出典：道路交通センサス（平成 27 年度）

●金沢区の公共交通網

出典：国土交通省国土数値情報（平成 22 年）より作成

＜課題＞

交通ネットワークを充実し、歩行者、自転車、車、バスなどが、スムーズに移動できるようにする必要があります。特に東西方向の幹線・主要な地域道路を整備することや、南北に谷筋相互を結びつける道路を整備することで、体系的な道路ネットワークを形成することが求められています。また、区内にはバス停からも遠く不便な地域があり、公共交通網の充実が求められます。

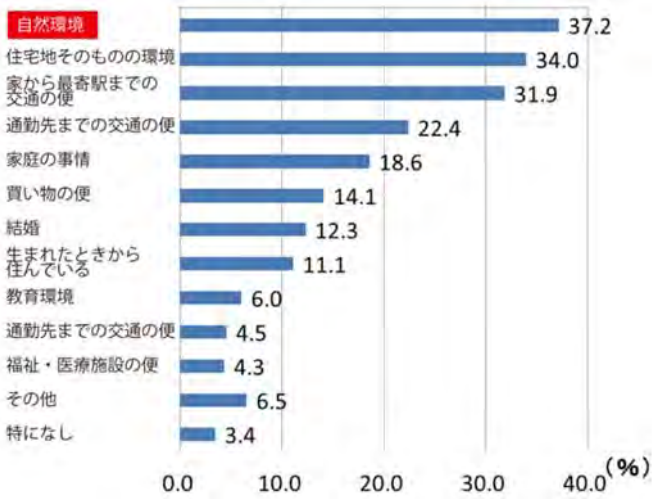
(4) 自然環境

＜現況＞

金沢区は横浜市の中でも自然環境の多彩さと豊かさに秀でた区と言われます。それは、源流から海までの水系が区内で完結し、多様な自然の姿を身近に目にすることができることによります。丘陵に包まれた落ち着きと、前面に海が広がる開放感を兼ね備えるという、風景的に見て恵まれた地形の構図をもっています。さらに、自然環境が豊かな所には歴史資源が多いことも特徴といえます。また、区民の皆さまを対象とした金沢区の暮らしや地域に関する意識調査では、住まいの場所を選んだ理由に自然環境と回答した方が一番多い割合となっています。

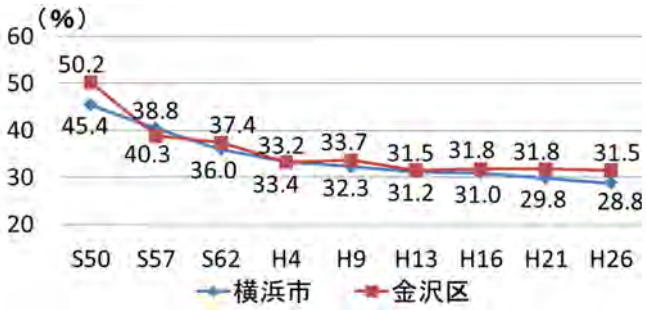
一方で、金沢区の緑被率の推移をみると、昭和 50 年に 50.2%であったものが、平成 13 年には 31.5%へ減少していますが、近年は、市民による生態環境回復の試みも盛んになっており、横ばいとなっています。さらに、河川や水路などにおいて、周辺環境との調和に配慮した、市民が親しめる水辺空間の整備を進めています。

●住まいの場所を選ばれた理由



出典：金沢区暮らしや地域に関する意識調査 2014

●緑被率の推移



※緑被率は調査年度により調査手法や制度が異なるため、おおむねの傾向を示したもの

出典：横浜市統計書

●水辺及び河川・水路などの環境整備図

出典：横浜市水と緑の基本計画（平成 28 年 6 月改定）

＜課題＞

区内で完結した水系や丘陵部に広がる緑について、生物多様性に配慮した自然環境を保全するとともにそれらを身近に感じられる環境を創出し、市民生活との関わりを深めることが求められています。さらに、水と緑の自然環境を連携させながら活用を進めることが求められています。

(5) 防災

＜現況＞

金沢区は海と丘陵部の自然環境に恵まれている一方で、谷戸が入り組んだ地形的特徴から大雨による崖崩れ、河川の氾濫による浸水などの可能性が高い地区が存在します。また、海に近い所では津波や高潮の被害が発生することも心配されます。

さらに、戦後間もない時期から急速に市街化が進んだため、道路をはじめとした都市基盤が脆弱で、地域によっては狭あい道路が多く、木造家屋が密集した災害に弱い市街地が多く存在します。

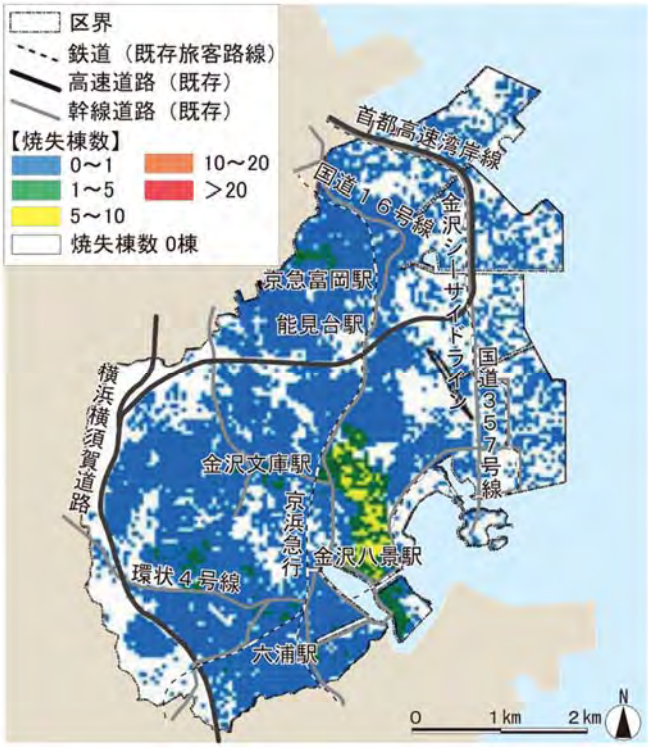
●金沢区の洪水ハザードマップ

参考：洪水ハザードマップ（平成 22 年）

●金沢区の土砂災害ハザードマップ

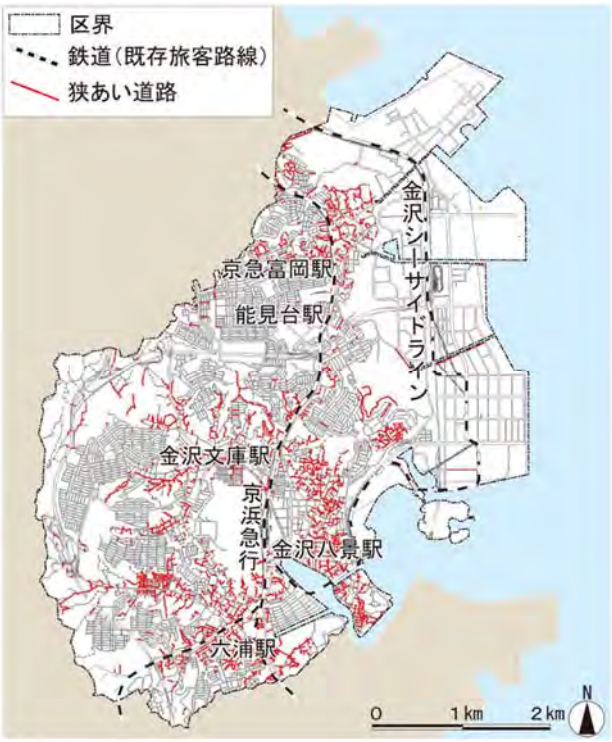
参考：土砂災害ハザードマップ
（北部：平成 26 年、南部：平成 28 年）

●金沢区の地震による想定焼失棟数



出典：総務局資料（焼失棟数：50m メッシュ）
（元禄型関東地震：冬 18 時、風速 6m/s））

●金沢区の狭あい道路



出典：横浜市地図情報提供システム i マッピーにより作成

＜課題＞

木造家屋の密集市街地で防災上の安全性を高めるとともに、自然災害に対する都市の防災機能の強化や、大規模地震による津波や局地的な大雨の発生による土砂災害や水害などに強い防災対策を地域と協働で進めていくことが必要です。

(6) 地域資源を活用した地域の活性化

＜現況＞

金沢区の自治会町内会加入率は 81.9%（平成 27 年 7 月 1 日時点）で、市内で 2 番目となっており、地域活動への参加に加え、自然、歴史、文化、産業、大学などの金沢区ならではの地域資源や福祉といったテーマをもって、好ましい地域環境の維持・改善を目指す市民のまちづくり活動も盛んです。また、身近な生活地域を超えたネットワークでの活動もみられます。

＜課題＞

身近にある自然、歴史、文化、産業、大学等の魅力的な地域資源の活用をさらに促進し、地域の特性を生かすまちづくり活動を支援することで、地域コミュニティ活動を充実化し、区内外における交流人口の増加による地域の活性化が求められています。